

高校生を含む十八歳未満の方の閲覧を禁止いたします。

この物語はフィクションであり、

実在する人物・団体・事件等には一切関係がありません。

なお物語に出てくる表現等はすべて創作です。

犯罪行為を助長させるものではありません。

絶対に真似をしないでください。

無断転載、複製、ウェブへのアップロードを禁止します。

変態ホイホイな私はエレベーターに閉じ込められ
イケメン配達員におしっこもイキ潮も
出し尽くすまで蕩けさせられました
体験版

桜雨ゆか

変態ホイホイな私はエレベーターに閉じ込められ

イケメン配達員におしっこもイキ潮も

出し尽くすまで蕩けさせられました

（雨、すご……。思ったより濡れちゃった……。）

スーパールのビニール袋を下げた私は、びしょ濡れになった傘をたたむのもそこそこに、マンションのエントランスへ滑り込んだ。

休日の午後。外はバケツをひっくり返したような大雨だ。

傘をさしていたはずなのに、スカートの裾や靴の中までぐっしょり

と重たい。

（早く帰って、あったかいお茶でも飲も……）

エレベーターの前まで歩き、ボタンを押す。

タイミングよく一階に停まっていた箱が、ポオンと軽い電子音を立てて静かに扉をひらいた。

私は中に足を踏み入れ、行き先階のボタンを押す。

扉がゆっくりと閉まりかけた、その時だった。

パタパタパタッ、と濡れた靴底がエントランスのタイルを叩く、少し速い足音が近づいてくる。

「すみません。乗ります」

低く落ち着いた声に、私はすぐに『開』を押した。

滑り込んできたのは、配送会社の制服を着た男の人だった。

（あ、福嶋さん……！）

よく知る顔を見て、思わず心の中で名前を呼んだ。

このマンションに、よく荷物を届けに来てくれる配達員さんだ。

身長はそれほど高くないけれど、作業服越しにもはつきりとわかる筋肉質な肩まわりに胸板。襟元から覗く首筋も逞しくて、配送業で日常的に鍛え上げられているのが一目で伝わってくる、無駄のない体躯だ。

それでいて顔立ちは鼻筋の通った端正なつくりで、少しでもキュッと上がった口角が、どこか意地悪で、けれどたまらなく色っぽい雰囲気漂わせている。

普通の柔らかくて誠実な物腰と、その顔立ちが放つ色気のギャップに——私は密かに彼のことを「ちよつとカッコいいな」なんて思ってしまった。

「あ、こんにちは！　ありがとうございます。助かりました」

「いいえ。お疲れ様です、すごい雨ですね」

「本当ですね。外、かなり降ってましたよね」

他愛もない挨拶を交わし、福嶋さんが濡れた黒髪をかき上げながら、行き先ボタンに手を伸ばす。

扉が閉まり、機械音を立ててエレベーターが上がり始めた——と思つた、次の瞬間だった。

ガタンッ！

衝撃とともに、足元が嫌な揺れ方をした。

「えっ……!!」

「おっと……!」

天井の照明がパッと消え、そのあとすぐに橙色の非常用照明に切り替わる。

エレベーターは——三階と四階の中間あたりだろうか——嫌な静寂を残してピタリと停止してしまった。

「——……うそ。とまっちゃった……?」

私が震える声で呟くと、福島さんは落ち着いた口調で「そうですね……」と頷いた。それから私の顔をそっと覗いて「大丈夫ですか?」と続けた。

「は、はい。驚きましたけど……」

「……ちよつと待っててください」

福島さんは取り乱すことなく、操作パネルの前に立って非常用インターホンのボタンを押した。

しばらくして、スピーカーから聞き取りづらいノイズ混じりの声が響く。

『ただいま救助の作業員を手配しておりますが、この大雨で各地でトラブルが発生しております……現場到着まで、一時間ほどお時間をいただく可能性がございます』

（い、一時間……!?）

スピーカーから流れた言葉に、私はめまいを覚えた。

この狭い密室で、福島さんと二人きりで一時間。

（どうしよう……すごく緊張する……）

幸い真夏ではないから、エレベーター内が蒸し風呂になるようなこととはない。むしろ涼しいくらいだ。そのせいで、雨で濡れた衣服が身体に張り付いて、やけに冷たい。

（ブラまで雨が滲みてるかも……。スカートも重いし……）

濡れた白いブラウスの下、いつもより透けている気がする。なんとなく自分の胸元に目を落としてしまう。

突然の閉じ込め事故で緊張しているはずなのに、私は隣に立つ福島さんの身体から発せられる熱と、仕草や声のひとつひとつが気になってしまい心臓がどくどく鳴ってどうしようもなかった。

ちらりと福嶋さんを見ると、こちらの濡れてスケスケになっているブラに一瞥もくれず、真面目そのものだ。

「すみません。ちよつと電話します」

そう言つてスマホを取り出して操作し始めた。

私はその隣で、壁に背中を預けるとほつと息を吐いた。

（――……よかった。福嶋さんがいつも絡んでくる変な男の人たちみたいじゃなくて。そりゃそうだね。私ってば、ちよつと自意識過剰すぎ……）

私がそんなふうに疑心暗鬼になつてしまうのにも理由がある。

私は、昔から、なぜだか変質者や不審者——いかかわしい行為をしてくる男性に遭遇することが多いからだ。

押しに弱く、流されやすい自分の性質も多少は関係しているのかもしれないけれど、それにしたって強硬手段に出る人が多すぎる。

でも――。

（さすがに福岡さんもっていうのは、失礼すぎだね。ごめんなさい……）

よからぬ想像をしてしまったことに、心の中で謝罪する。

とはいえ、今みたいに閉じ込められた状況で逃げ場がなくて――なにかが起きてしまったら、自分はまた拒めないかもしれない。

（いやいやいやいや。なに考えてるの？ 馬鹿じゃないの。そんなことあるわけない、あったら困る！）

ぐるぐる考えていると福岡さんが電話を終えたようで、私の方に向

き直った。

「14時に集荷の依頼だったんですけど、間に合いそうにないんで連絡しました。いやあ、まいりましたね。——あ。よろしければ座りませんか？　これ、敷いてください」

福嶋さんが、自身のジャケットを脱いで床に敷いてくれた。

「えっ、あ、そんな、申し訳ないです！」

「一時間も突っ立ったままじゃ疲れますし。俺も座るんで……」

そう言って福嶋さんが敷いてないところに座って、ジャケットをぼんぽんと叩いた。

「——せめて荷物だけでも置いてください」

「あ、えと。じゃ、じゃあ、お言葉に甘えて……。あの、ありがとう

「ございます」

私がお礼を言って腰を下ろすと、福嶋さんが「いーえ」と笑った。
ふにやり、と下がったまなじり 眦が優しく、心臓がぎゅつとなる。

なんだか落ち着かなくなつて、下を向こうとした私に福嶋さんの声
がかかる。

「ご自宅、上の階でしたよね？ お買い物ですか？」

「あ、はい……。近所のスーパーまで行つてたんです」

「こんなことつてあるんですね……。まさか止まっちゃうなんて。――
寒くないですか？ 雨でかなり濡れちゃいましたよねー」

「あ、はい。上着……。大丈夫ですか？」

「俺は全然」

そう言つて、福嶋さんはふつと柔らかく目を細めた。

狭いエレベーターの隅で、肩が触れそうなほど近い距離。

膝を抱えるようにして座っていると、福嶋さんのシャツからほんのりと漂う、雨の匂いと男の人特有の体温がダイレクトに伝わってくる。やっぱり、ちよつとかっこいいな……なんて不謹慎なことを考えて、私は密かに頬を熱くした。



福嶋さんと他愛ない話をしつつ救助を待っている中、私は自分に訪れた衝動にぎゅつと手を握りしめた。

（——……うそ。嘘でしょ……っ？）

下腹部の奥の方で、じわじわと嫌な圧迫感が膨らみ始めている。

（なんで……よりによって、今なの……!?）

冷え切ったスカートの裾、肌に張り付く雨の冷氣。

そしてなにより『かつこいいと思っていた男の人と二人きりで閉じ込められている』という緊張感。

いろいろな要因が一気に押し寄せて、さっきまで大人しかった膀胱が、急激に存在感を主張し始めたのだ。

（おしっこ……したい……。だめだめだめ……っ！ 我慢、我慢しなきゃ……!）

スーパ―を出る前に念のためにも行っておけばよかった。

「すぐ家に着くし」と後回しにした自分を全力で呪う。

エレベーター会社に連絡してからまだ三十分も経ってない。救助がくるまでおそろくもうしばらくかかるはずだ。

（早く。早く、動いて！）

考えないようにすればするほど、尿意が大きくなっていく。

「……？ どうしました？」

私の様子がおかしいことに気づいたのか、福島さんが不思議そうに覗き込んできた。

「えっ!? い、いえ！ なんでもないですっ……!」

慌てて声を張ったけれど、お腹に力が入ってしまって、ヒュツと喉が鳴る。

私は慌てて足をキュッと内股に閉じ、膝を抱える手にぐっと力を込めた。

（漏らすわけにはいかない……。こんなところで……。福嶋さんもしるのに……）

波のように押し寄せる強烈な尿意に、思考がどんどん白く塗り潰されていく。

もじもじと下半身を動かしたくなる衝動を必死で抑え込もうと、私は固く目を閉じ、浅い呼吸を繰り返すしかなかった。

「気分悪いですか？」

「いえ……」

福嶋さんの心配そうな声。

ごまかせてない、と焦りが募る。

見れば福嶋さんの目が私の下半身に落ちている。

じろじろと見ているわけではないけれど、目ざとく見抜かれてしま
いそうで怖い。

「あの、その……えと……」

口から出てきたのは、意味不明な言葉ばかりだった。

言い淀んでいるうちに、じわじわとお腹の奥が重たくなっていく。

福嶋さんがじつと見てくるからなのか、心臓の鼓動がやけにうるさ
い。

鼓動に合わせて下腹部まで脈打つ感覚がして、余計に尿意が増して
いく。

「な、なんでも、ないんです……」

尿意からきた切迫感で、私は泣きそうな声で呟いていた。

「もしかして——」

福嶋さんの声はあくまで穏やかだ。けれど彼の視線がぎゅっと閉じた太ももの付け根あたりに突き刺さっている。その視線に、さっきまで少しでも好意的な感情を抱いていたことが途端に怖くなる。

（なんか、すごく、変な感じがする……）

「——おしっこ、したいんですか？」

はっきりと言われ、心臓がどきんと跳ねた。

「——っ!? しっ、したくないです……っ!」

「本当に？　今、膀胱パンパンなんじゃないですか？」

「っ……」

否定しようと首を振ると、福島さんがじっと目を覗き込んでくる。黒い瞳にうつすらと非常灯の橙が揺れて見えた。

「我慢しちゃだめですよ。身体に悪いですから」

「で、でも……」

エレベーターが止まっているのだから、トイレに行けないのは福島さんだってわかってるはず。

だめなものにも、我慢する以外にできることはない。

なのに、彼の言い方はまるで「ここで漏らせ」と言ってるみたいで、私はぶんぶんと首を振る。

「だ、だって、ここ……」

「ここで、していいですよ」

「っ！ そっ、そんなのできるわけじゃないじゃないですか！ なに言つて……っ」

「だって、本当はもう限界でしょ？」

ぐいっと福島さんの顔が近づく。

（げ、げんかい……。いや、限界だけど。限界だけでも！）

太ももをぎゅうっと締め付けて、膝を抱える腕にさらに力を込める。もう指先が白くなるくらい。

確かに、おしっこは今、本当にギリギリだった。

（そんな……できない。できるわけない。こんな人前で……っ）

「あ、じゃあ。俺の上着で隠してしちゃったらどうですか？ 俺、あ

「つち向いてますし」

「や……。い、やです……。できない、です……。っ」

（なんで、なんでそんなこと言うの……。？）

心臓がばくばくする。

目の奥が熱い。

私は福嶋さんから逃げるように身を引いた。けれど、狭いエレベーターの中だ。逃げ場なんてほとんどない。

福嶋さんは身を乗り出して、私の膝の上を大きな手でゆっくりと撫でた。

「震えてる。可愛いそうに……。もう出ちやいそうなんですネ？」

「や……。やだ……」

（おかしい……。福嶋さん、おかしい……。！）

心の奥で警鐘が鳴り響く。

荷物を運ぶたくましい腕や、優しい笑顔をかつこいいなんて思っていたのに——今は口元に浮かぶ意地悪な笑みが怖くてたまらない。

「救助来るまでまだ時間かかりますよ？　我慢、無理ですよね？」

「だっ、大丈夫です！　我慢、できますから……。っ。そっとしておいてください」

「一人でするの恥ずかしいなら、俺も一緒にしましょうか？」

「そういうことじゃなくて……。っ」

だんだんと視界が涙で歪む。

心臓までドキドキして耳鳴りがする。呼吸の仕方もうわからなくなり

そうだ。

「我慢しすぎると膀胱炎になりますよ？」

「大丈夫……大丈夫ですから……っ」

「大丈夫じゃないですよ。そんなにプルプル震えて」

「ううっ……」

事実、尿意は高まるばかりで、お尻が勝手にもぞもぞと動いた。

そんな私の動きを見ていた福嶋さんが、ふ、と喉の奥を鳴らした。

「ほら、我慢することないのに。俺気にしないですよ？」

「——っ！ わ、私が気にしますっ……！」

「でも、緊急事態だし。顔色、良くないですよ？」

いよいよ福嶋さんの両手が私の膝を掴んだ。

左右に開くように軽く力を入れられて、私はひっと悲鳴を上げた。

「やだやだやだやだっ……!! やめてください……っ」

思わず福嶋さんを見上げて、私はそこで短く息を呑んだ。

にこにこ微笑む福嶋さんは、私を心配していると言うより純粹に楽しんでいような、それでいて昏い熱を腹の奥に滾らせているような――男の目をしていた。

（あ……。だめだ。私、また、変な人に捕まっちゃった……?）

『排泄を観察したい』そんな悪意が透けて見えた。

これまでの優しくてかっこいい配達員さんのイメージが音を立てて崩れ去っていく。

「パンツ脱いで、おまんこに俺の上着押し付けておしっこ吸わせちゃ

いましょつか？ そしたら見えないし、音も聞こえないし恥ずかしくないですよ？」

「なに言って……!？」

「このまま我慢できなくなって漏らしたら、パンツもスカートもびしょびしょになっちゃうし、床にも水溜まり作っちゃう。そっちのが恥ずかしいんじゃないですか？」

「そ、そんな……」

「ね？ 俺、今日のこと、誰にも言わないですから……」

福島さんは優しい声音で誘惑しながら、触れている手で膝を少しずつ、ほんの少しずつ開かせてくる。

「っ……」

（やだやだ。パンツ、見えちゃう……！）

抵抗しなきゃ、と思うけど、強い尿意に身体が思うように動かせなかった。

（おしっこ……。おしっこ我慢できない……）

太ももをぴったりくっつけていたくても福嶋さんの手が邪魔してくる。

内腿を撫でられるたび筋肉が震え、ぞわぞわとした感覚の逃げ場を探して腰が揺れる。

「んう……っ、や……。無理です……。こんなの……」

限界はもう超えていた。

このままでは確実に漏らす。

「あ。もしかして……—我慢するのが好きなんですか？」

「そ、そんなわけ……っ……？」

ふるふる首を振りながら悲痛な思いで福嶋さんを見る。

「んー……。じゃあ、俺、手伝いましょうか」

「や……っ、だ、だめっ……！！」

私が逃げるよりもずっと早く、福嶋さんの手がスカートの中に滑り込んでくる。

そこからはあっという間だった。

大きな手にショーツを掴まれたと思ったら、次の瞬間にはもう引き下ろされて、すうりと脚から抜かれた。

「はい、脱ーげた」

福嶋さんは上機嫌で、手にした私のショーツを顔の高さに持ち上げた。

「やだ……！ 返して……っ」

「あとで返しますから。おしっこは待ってくれないですし。……ほら」無理やり、というほど強い力ではなかった。

福嶋さんの手が膝裏に入り込み、ぐいっと持ち上げられて大きく開かされる。

「やつ、見えちゃ、う……！」

剥き出しのおまんこが、空気に触れてひんやりする。

慌てて両手で隠そうとしたけれど、すかさず福嶋さんの手に掴まれて阻まれてしまった。

「やめ——っ！」

エレベーターの壁に背中を預け、腰を床に落としたM字開脚。

無様な格好で、ぱっくりと開かれた私のおまんこへ、福島さんの黒い瞳が落とされる。

「うわ、えっろ……♡ 綺麗なピンク……♡」

「~~~~っ！」

（恥ずかしい……。あっち向いてるって言ったのに……！ うそつき……）

顔が熱い。視界が涙で滲む。

頭がぐらぐらする。膀胱が苦しい。

（だめだめだめ……っ。見ないで……見ないで……っ）

福嶋さんの視線を感じて、おまんこが勝手にひくひく動いた。

「おしっこしたくてたまらなそうですね。このまましちゃっていいですよ？　ほら、可愛い音聞かせてください」

「ううっ……。やだ……。見ないで……。！」

「——…見ないつもりだったんですけど、ね。あまりにそその顔で我慢してるから……」

福嶋さんがそう呟いて、私の脚の間に身をかがめた。

「やあっ……。！」

指の腹がおまんこをゆっくりひと撫でした。

「力抜いておしっこしちゃいましょ。出すお手伝いしますね」

福嶋さんの手のひらが逃げる私を追いかけて、下腹部に押し当てられ

る。

「つつつ……！」

ぐっと押し込まれて、尿意が暴発しそうになる。

思わず目の奥がちらついて、声にならない悲鳴が漏れた。

「ひっ！ やだ……！！ 押さな、でえ……ッ！」

「大丈夫大丈夫。上着敷いてあるんで、床に広がったりしないですよ？

しちやいましょ？」

「できない……！！ おしっこ……！！ できないいい……っ！」

「できますって。ほら、いい子いい子……♡」

器用に片手だけで股を割り開いた福嶋さんの指が私のおまんこの入り口から、尿道口あたりをゆっくり指の背でさすり上げた。

「ひ……あ……っ♡」

くの字に曲げた指の関節で、くりくり、くりくり♡と尿道口を刺
激される。

くすぐったいのか、気持ちいいのかわからない。ゾワッとした痺れ
が背筋を駆け上がる。

「や……そこ……！ やだ……っ！ 触らないで……っ」

（やだ……。おしっこ……。おしっこ漏れちゃう……。っ！）

「うん？ こっちさわった方が出しやすいですか？」

福島さんの指が、尿道口を離れ、今度は割れ目の上のほう——小さ
な突起を撫で回しはじめた。

「あっ……！ や、そこ……！」

（嘘……。うそ……。！）

気持ちいい♡ そんなことを認めたくなくて、私はぶんぶんと首を振った。

だけど本当はもう脚に力が入らない。

「わかりやすっ……。♡ クリトリス、もう硬くなってきた」

「ちが……」

「おしっこ我慢していると、感じやすくなるって言いますもんね……」

「ちが、う……。！ ちが……。っ」

「クリ弄られながらおしっこするの、きもちいいですよ？」

「ひゃう♡」

小さくビクンと腰が跳ねた。

すかさず福嶋さんの指がゆっくりとクリトリスを左右に転がす。

「あ……はあ……っ♡　だめ……♡　そんなことされたら……ッ♡」

（おかしくなっちゃう……。おしっこ……。我慢してるのに……。♡）

「ぷっくり腫れてきてますね♡　……かわいい♡　あー……舐めてえな

……♡」

「だめ……！　だめだから……ッ♡　や……うう……！　おねがっ……

……！　ほんとに、漏れ……っ！　おしっこ出ちゃう……ッ♡！」

「だからあ、出していいよって……。♡」

クリトリスを丁寧にくるくると捏ねるような動きから一転、指先で
きゅむ♡　と摘まれ皮を剥かれた。

変態ホイホイな私はエレベーターに閉じ込められ
イケメン配達員におしっこもイキ潮も
出し尽くすまで蕩けさせられました 体験版

著者 桜雨ゆか

発行元 桜結び

発行日 2026 年 9 月 15 日

X <https://x.com/sakurayuka317>

連絡先 sakurayuka317@gmail.com